

体験的学習の活用における留意点

能條 歩（昭和61年卒）
北海道教育大学岩見沢校

1. はじめに

総合的な学習の時間のみならず、一般の教科の授業においても体験的な学習を取り入れることが推奨されている。体験的な学習を取り入れることで学習効果が高まることは、少しでも教職現場に携わった経験があれば誰しも否定はしないであろう。しかし、「どのような場面でどういう手段をとることが教科の目的を達成するにあたって適切なのか」ということについては、あまり明確になっていない。また、「這い回る体験（経験）主義」という批判を浴びることがあるように、体験的な学習は「ただ体験させただけ」に終わってしまうという危険性もはらんでいる。本論では、学校教育における体験的な学習と、学校外で行われている自然体験学習との違いを考えながら、学校教育場で適切と考えられる体験学習について議論したい。

2. 学校での体験学習と学校外の体験学習

体験的な学習の場面は、学校で行われるもののほかにも、地域で行われる自然体験イベントや科学館で行われる科学体験などがある。それらの体験の場面と学校での体験学習とではどのような違いがあるだろうか。まず、第一に挙げられるのは目的の違いである。学校での体験学習は通常ある教科の学習の一場面であり、その教科の目的の達成のための手段の一つである。これに対して、学校外での体験学習は、何かの目的を達成するための手段であることもあれば、体験自体が目的になっていることもありその時によって様々である。したがって、学校外で行われている体験活動のプログラムを学習活動としてカリキュラムに取り入れるにあたっては、どのような目的にあわせて組み立てられるものであるかに注意し、学校での目的に合ったアレンジを行うことが必要とされる。たとえば、もともと「自然を五官で感じる」ことを目的に組み立てられたプログラムは、教科の目的の中に「五官で感じる」ことをきちんと位置づけすることなく、そのままの形で学校で実施すれば、「やりっぱなし」という批判を受けることがあるかもしれないが、自然体験学習としては五官を使うこと自体が非常に重要な目的のひとつであり、体験することだけでも目的を達成できる場合があるため、そこでは「這い回り」「やりっぱなし」の批判はあたらないのである。

学校内の体験活動

各 教 科... (教科の) 目的達成のための手段

総合的な学習の時間...目的達成のための手段, 体験自体を目的とする

学校外の体験活動.....体験自体を目的とする,(上位の) 目的達成のための手段

第1図 学校の内外における体験活動の位置づけ

では, 学校外での体験学習には「這い回り」や「やりっぱなし」の批判があてはまる場合がないかといえそうではない。

そもそも「這い回り」や「やりっぱなし」の批判は学校の内外を問わず, 学習活動の目的を達成することなく単に体験活動を行っただけという場合に起こりうる指摘である。学校外の体験学習では「体験すること自体が目的」という場合があるので, 学校内での活動に比べるとそうした批判を受ける場面は少ないかもしれないが, 目的達成に向けてプログラムされていない活動の体験は, やはり豊かな体験活動とはいえないのである。

3. 体験の総括における違い

- 「授業のまとめ」と「ふりかえり/わかちあい」 -

通常の授業では最後に「まとめ」を行い, 今日の授業でどのようなことを学んだのかを確認する時間を持つ。同じようなことを学校外の体験学習でも行うが, それは通常「まとめ」とはいわずに「ふりかえり」または「わかちあい」と呼んでおり, その中身には授業で行う「まとめ」とは異なった“風情”がある。

そもそも体験とは個人的なものであり, まったく同じ状況に置かれていても, それをどう感じるかは人によって千差万別である。たとえば, 42のお湯に使っているときにリラックスできる人もあれば, 熱くてたまったものではないと思う人もいる。同じ刺激に対する反応でも個人差があるのである。したがって, 「今日はどんな体験をしたか」というまとめを行おうとするときに, それを全体の場で「今日は気持ちがいい/わるい経験をしましたね」という感じでひとくくりにすることはまったく不適切であろう。一方, 授業のまとめでは必ずしもこういった個人の感覚を尊重して終わることはできない。気持ちがいいとか悪いとかではなく 1+1は2であることが求められるのであり (全ての授業がそうではないにせよ)「まとめなくてもいい」という授業はあまり歓迎されない。Open endの授業というのもあるが, どちらかというとな教員も子どもも「授業で何を学んだのか」という実感を得て終わるものが好まれる傾向にある。

では, 体験学習で行われている「ふりかえり/わかちあい」とはどのようなものであるのか。「ふりかえり」と「わかちあい」は基本的には異なるものではある

授業の総括...「まとめ」(学習内容の整理・定着・確認)

体験活動の総括

「ふりかえり」(体験内容とそのときの感覚・感想の想起)

「わかちあい」(異なる感覚・感想を紹介しあい他者とその経験を認知する)

第2図 学校の内外における体験活動の総括の違い

が、全体の場合「ふりかえり」をすることで「わかちあい」効果をねらう、という形が一般的のようである。前述のように、体験は個人的なものであるから、一緒に体験した人が自分と同じようなことを考えていたとは限らない。同じ場を共有した人の異なる考え方や自分の気づかなかったことを紹介しあうことは、限られた時間の体験をより豊かなものにしたり、「多様な人間がいてこそ健全な社会」という発想の第一歩としての人間理解にもつなげることができる。そのために行う「ふりかえり」は、「今日は何を体験したのか」「そのとき自分の五官はなにを感じたのか、頭で何を考えたのか」を想起するためのものである。しかし、このような運営法は、授業における「まとめ」とは異なるので、時として「やりっぱなし」に見えることがある。こうした意味でのある種の“誤解”が、体験的な学習を活用した授業を「這い回り」に追いやったり、目的を達成している授業に対して「這い回り」や「やりっぱなし」という不当な評価を与えてしまったりする元なのではないだろうか。

4. 学校での体験的学習の導入における留意点

これまで述べてきたように、体験的な学習は活動内容が同じであっても目的をどこに置くかによっては効果が異なるし、総括の仕方も変わってくる。学校での体験的学習は体験それ自体を目的とするものは少なく、より高次の学習の目的を達成するための手段となっている場合が多い。一方、学校外で行われている体験学習は体験自体が目的のものも多い。

体験的な学習は学校外での取り組みのほうが事例が豊富であり、プログラムや方法論も洗練されているものが多い。したがって、学習効果が高いことが実証されているものを学校教育の場でも活用するのは素晴らしいことではあるが、あくまでも前述のような違いを踏まえて組み立てられているプログラムであり、その範囲内で効果的な活動に仕上がっていることを忘れてはならない。したがって、パッケージになったプログラムを導入することは様々な利点はあるが、どの活動をどの単元のどこで行うか、についてのきちんとした位置づけを教員が与えなければならない。そして、目的に沿った体験学習を組み立てるととも

に、授業のまとめに際しては、学習内容のまとめとしてきちんと整理すべき部分と、体験が個人的なものであるという考えに基づいて、まとめてはいけな部分とがあることに留意する必要がある。この活動の総括の部分があいまいになっている活動が、「這い回り」「やりっぱなし」の体験学習につながっているといえるだろう。個人に帰する部分と全体で共有する部分、そして全体で確認できる部分をきちんと整理して授業に臨むことができれば、体験的な学習により大きな効果を生み出すことであろう。その部分の交通整理を行うために、教員には以下の心構えが必要であると考えられる。

- 1) こどもが実際に体験する内容と時間を確保する (体験活動の保証)。
- 2) こどもが体験内容を自分のなかに定着できるように促す (ふりかえり)。
- 3) 個人の感覚を否定しない (受容)。
- 4) 個人の感覚を全体でも否定せず受け入れられるような場を提供する (わかちあい)。
- 5) わかちあいの中から共通する部分があれば確認する (授業のまとめ)

つまり、授業として「まとめ」の部分を求めるような体験学習では、わかちあいのなかから自然にまとまってくる部分が出るように学習をセットするか、わかちあいを通して得られた考えのうち、授業の目的達成のために適切な部分を取り上げて、(次の授業の)新しいテーマとして追及していくような流れを考える必要があるだろう。

「体験のまとめの押し付け」は、体験的な活動本来の持つ良さを否定する。さらに、個人の感覚を否定するようなまとめかたは、自分の体験からくる考えを肯定できない子どもを育ててしまう危険性がある。こうしたことを繰り返せば、自分で考えることをやめ、他から示される“他者の経験”を無条件に受け入れやすい状況を生み出すことにもつながりかねない。体験的な学習は効果的である一方、使い方を誤ると学習効果を失うだけでなく、体験しないですませる人間を育てるといって、全く逆の効果を生む危険性もある諸刃の剣であることを意識したいものである。

追記 本論の考え方を延長すれば、これまで指摘されてきた「這い回り」「やりっぱなし」批判の多くは、「教科の目的と本時の目標」と授業の中身の関連を授業者が十分に咀嚼できていない場合に発生しているものと考えられる。筆者は、「授業の目的が授業者の中にきちんと位置づけられていない場合には、通常の形態の授業でも這い回りは発生している」と考えている。教員が、「理科の目的」「理科の基礎」・「基本」について説明できないとしたら、個々の授業の目的を云々することは不可能である。両者の間にある問題を糸口にして、いずれ総合的に問題点の指摘と解決策を考察してみたいと思う(んだけど、大学は意外と時間がなくて、じっくり考える暇がないからいつになるかなあ..)。